

本と人がつながる 星座のよらかな物語

児島 青 (漫画家)

『本なら売るほど』インタビュー



『本なら売るほど』第1話。故人の遺品の買い取りを遺族から依頼された古書店の店主が、本棚を前にして故人の人となり思いを馳せるシーン。
© Ao Kojima 2025/KADOKAWA

古書店を舞台に、人と本の間を多面的に描いた漫画『本なら売るほど』。作中に登場する本はどれも本好きなら手に取ってみたいくなるものばかりだ。どのような読書経験からこの漫画は生まれたのか。作者に尋ねた。

——森茉莉、岡本綺堂、寺田寅彦、翻訳小説と、『本なら売るほど』(KADOKAWA)に登場する本や作家から、児島さんが読書家だと伝わってきます。第一話「本を葬送る」には本をめぐる厳しい現実と本への愛情が描かれていますね。児島 編集の方から「漫画を描いてみませんか」と言われるまで、自分が漫画家になるとは思っていませんでした。第一話は読み切りとして描いていて、何年も連載する作品になるとは思わなかったし、漫画家としてやっていけるかもわからなかったんです。「これが最初で最後かもしれない」という気持ちで、それまで見聞きした本をめぐるエピソードや印象に残っていることすべてを描きました。そのままだったら私の心の中で終わってしまうけれど、作品にして残しておけば自分が生きて証しにもなりますし、私以外の人にも読んでもらえるな、と思って。——「十月堂」の店主は脱サラした若い男性で、悩みながら古書店を経営しています。児島 古書店を舞台にした人間模様や物語を考えたとき、狂言回しとなる主人公はステレオタイプを裏切るようなキャラクターがいいな、と思いました。そこで思慮深そうに見えないそのへんにいる「あんちゃん」みたいな人物にしたんです。でもあまり計算はしていませんよ。

「ひみつシリーズ」で得た雑学

——好きな漫画家や作品は？

児島 あだち充先生が大好きでした。自分のセンスが形成される前、子ども時代から読んでいたので原点になっていますね。演出が洒落で、あくまで軽い飄々とした語り口が大好きです。一番影響を受けているかも。なかでも『みゆき』や『タッチ』、それから高野文子先生の『るきさん』は繰り返し読んでいます。

——他にどんな本を読んでいますか？

児島 親が買ってくれた本が家にたくさんありました。学研の「ひみつシリーズ」という学習漫画が、ある日、家にどーんとやってきて。何十巻もあるシリーズを読んでいました。私の雑学の知識はそこからきていると思います。

——超常現象とか不思議なことが好きだったので

『いる？いない？のひみつ』は熱心に読んだ記憶があります。「ひみつシリーズ」は個性豊かな漫画家さんが描いていて、そうした違いも面白かったですね。大好きでした。

——あとはミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』も、何度も読みました。

——最近はどうな本を買いましたか？

児島 いろいろ買いこんでいますが、「オーストリア綺想小説コレクション」(国書刊行会)というシリーズは装幀に惹かれて買って、面白かったです。一冊目の『廃墟建築家』(ヘルベルト・ローゼンドルフ著)は持っていて、二冊目の『男爵と魚』(ペーター・マーギンター著)を先日買ったんですが、二冊ともとても面白かったです。三冊目『メルヒオール・ドロンテの転生』(パウエル・ブッソン著、以上三冊すべて垂野創一郎訳)も今、注文しています。国書刊行会の本は装幀がすごく素敵で、世界中の知らない作家さんを意欲的にとりあげてくれるので、思わず手に取ってしまいます。

——翻訳小説もお好きなんですか？

児島 少し前まで翻訳ものが苦手な読み手でしたが、あるとき急に、読めるようになりました。ポール・オースターの『ムーン・パレス』や『幽霊たち』は中学生のころに読んだ記憶があるんですが、中学生には早かったのか「よくわからないな」と思って、それきり読んでなかったんです。でも先日、『サンセット・パーク』を新潮文庫で買ってみました。大人になっただけで印象が変わっているかと思う、読んでみようかな、って。

——同じ本でも年を経る本印象が変わること

——ありますよね。児島 自分にとっての「本の匂」がありますね。一〇代のころに読んですごく影響を受けたのに、読みかえすとつまらなく感じてしまったり。その人ごとにタイミングがある気がします。——翻訳ものが苦手だったのは訳された日本語への違和感や、原書で読めないことへのものごかしさもあったんだと思います。でも最近、少し不自然な部分をふくめて愛せるようになりました。『星の王子さま』など、古典的な本はいろいろな翻訳家の方が訳しているので、読み比べるのも面白いですよ。翻訳という一つの世界の面白さに気づき始めたんだと思います。——そのきっかけとなった作品はあるんですか？児島 サン・テグジュペリの『人間の土地』(堀口大樹訳、新潮文庫)でしょうか。『人間の土地』を読んだころから、翻訳ものへの考え方が変わってきた気がします。

——紙の本の魅力について、どうお考えですか？

児島 本を読むことについての話題になると、昨今、「デジタルと紙、どちらを選ぶのか」という議論になります。私はまったく別のものだと捉えています。同じ本が電子書籍と紙で出ているとして、内容は同じですし、読んだことで得られる知識は同じだとしても、物理的に「ここ